

中学校特別支援学級における音楽療法的視点を取り入れた 「自立活動」の展開

有田川町立八幡中学校：河島幸子

有田川町立吉備中学校：松本久三 南川雄星

和歌山大学教育学部：上野智子・菅 道子・山崎由可里

【研究の趣旨】

本取り組みは、音楽療法的視点を取り入れた自立活動での取り組みをととして、特別支援学級における授業づくりの可能性や支援あり方について大学教員と公立学校教員の連携によって実践・検証しようとするものであり、2013(平成 25)年度より継続して行っている。

本取り組みのきっかけとなった特別支援学級の生徒達は、それぞれの障害の特性や発達の遅れ、生徒自身の障害受容の困難さなどから、学習面での躓きや通常学級の生徒らとの対人関係などに問題を抱え、中学校生活に馴染めずにいた。このような状況に対して当時の担任（河島）は、学習面の問題を解決する以前に、生き生きとした「学校生活を送るための基盤」づくりが何よりも大切であると感じていた。担任によれば、「学校生活を送るための基盤」とは、自己肯定感や心理的安定、自己表現、仲間づくりなどを指す。このことを、作物を育てる際に重要となる土づくりに例えて「心の耕し」と表現した。そして生徒たちが音楽を好んでいたことから、音楽を用いて「心の耕し」ができるのではないかと考え、本取り組みが開始された。筆者らは、生徒たちが音楽に興味をもっていること、そして心のケア＝「心の耕し」を目的のひとつに含む音楽療法に着目し、その理論と技法を援用した音楽活動を「自立活動」において考案・実施することにした。

「自立活動」は、「個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培うことを目的とした特別支援教育の指導領域の一つである。本取り組みを「自立活動」で行った理由として、「自立活動」で示されている 6 区分 27 項目と音楽療法における音楽の機能において共通点が多いこと、さらに本活動の目的である「心の耕し」とも合致しているが挙げられる。以上より、「自立活動」において音楽療法の考え方や手法を取り入れた音楽活動を実施した本取り組みは、通称「音楽の時間」と呼ばれるようになった。「音楽の時間」では、オープニング、クールダウン、エンディングといった固定された活動の間に、歌唱、創作、身体表現、合奏など生徒たちが自由に選択できる活動を設定している。そして、音楽療法実践においても重視される以下の 5 点①この場において必要不可欠な存在としての「個人の承認」、②生徒や教員としてではなく一人の表現者としての「対等な関係性」、③一人ひとりの『いま・ここ (here and now)』の表現の重視、④生徒の日々の様子やそれまでの「音楽の時間」での様子などの背景を踏まえた「生徒一人ひとりへの配慮」、⑤非言語的な関わりを促す「音楽によるコミュニケーション」を音楽療法的視点とし、活動を考案・実践する際には留意している。また、活動に適切な楽器や楽曲の選択、模倣や即興の多用、表現するタイミングや表現しないことの尊重なども音楽療法の手法や考え方から援用している。

今年度は、昨年度と同様に八幡中学校と吉備中学校と連携して「音楽の時間」を実施した。八幡中学校の取り組みでは、「音楽の時間」の中で地元の民話をもとにした音楽劇を考案し、文化祭で発表した。また、吉備中学校の「音楽の時間」は2月に実施するため、活動の詳細は報告会にて述べる。

【研究の経過】

有田川町立八幡中学校

1. 参加者

本年度の参加者は、以下のとおりである。昨年度小学校特別支援学級に在籍した3名が、中学校に入学したため、参加者に変更はない。

◆八幡中学校：

八幡中学校特別支援学級…5名（1年生…女子：1名、男子：2名）（2年生…女子：1名、男子1名）
中学校特別支援学級担任…1名 保護者…1名

◆和歌山大学：

和歌山大学教員 …3名 大学院生…2名

2. 時間・場所

昨年同様に、「音楽の時間」は1時間である。場所は、八幡中学校の最上階にある多目的室である。絨毯敷きなので、座ったり寝転がったりすることが可能である。また、廊下側はガラス窓になっており、室内で活動している様子がわかる造りとなっている。

3. 本年度の活動

本年度の「音楽の時間」は、2019年1月末までに計4回行った。表1は参加者の内訳と、プログラムの概要である。この他の活動として、担任との打ち合わせ（8月20日@和歌山大学）と文化祭での発表（11月25日@八幡中学校）がある。昨年度は小中接続の観点から音楽活動をとおして関係を構築することを目標とした。これを踏まえ今年度は、①昨年度最後の活動から参加した生徒A（以下、A）が、安心してこの時間を過ごせるようになること、②参加者全員で音楽劇を考え、文化祭で発表することを目標に活動を行った。

表1 2018年度 八幡中学校での活動

	第1回	第2回	第3回	第4回
年月日	2018年6月19日（火）	2017年9月26日（火）	2017年10月19日（火）	2017年11月13日（火）
時間	11:30～12:30	11:25～12:10	11:30～12:30	11:30～12:30
参加者	八幡中学校： 生徒…5名 担任…1名 保護者…1名 和歌山大学： 教員…3名 大学院生…3名 計13名	八幡中学校： 生徒…5名 担任…1名 保護者…1名 和歌山大学： 教員…3名 計10名	八幡中学校： 生徒…5名 担任…1名 保護者…1名 和歌山大学： 教員…2名 計10名	八幡中学校： 生徒…5名 担任…1名 保護者…1名 和歌山大学： 教員…2名 計10名
内容	・オープニング ・自己紹介 《Let's introduce!》 ・歌おう音楽 ・八幡の spring of music ・動きと音楽 ・エンディング	・オープニング ・『はちまんの河童鬼っ子』で音楽づくり① ・エンディング	・オープニング ・『はちまんの河童鬼っ子』で音楽づくり② ・エンディング	・オープニング ・『はちまんの河童鬼っ子』③ ・エンディング

（１）生徒 A が安心して「音楽の時間」に参加できるように

昨年度最後の回から本活動に参加した A は、少し緊張気味ではあったが、器楽合奏では自らマラカスを選択して演奏したり、歌唱では小さく口ずさんだりして彼なりに参加していた。しかし、音楽に合わせて自由に身体表現する活動では、緊張と不安に襲われた様子で、周囲の呼びかけにも反応できず俯いてしまった。

「音楽の時間」終了後、大学教員と担任でこの出来事について話し合った。大学教員からは以下の２点が反省としてあげられた。第１に、機敏な動きが苦手な A にとって、即時的な表現が予想以上に負担になっていたのではないかと。第２に、当該活動は１人が動作の手本として即興的に身体表現する。そのため、必然的に注目を集めることになり、A をより緊張させてしまったのではないかと。これに対して担任は、A が緊張したことを、自信をもって自己表現するためのプロセスであると肯定的に捉えた。そして、長時間の登校が難しい A が「音楽の時間」に最後まで参加できたこと、終了後の楽器の片付けでは積極的に手伝っていたことから、「音楽の時間」を肯定的に捉えているのではないかと述べた。

これを踏まえて、今年度の第１回目の「音楽の時間」では、A が柔軟に参加できるよう、担任によって参加できるところだけ参加、②見学だけでも可、③母親の参加、④苦手なところは誰かに代替してもらうことが提案された。大学教員は、①A が緊張せずに参加できるような学校生活や日常生活を題材にした音楽づくり、②操作の容易な打楽器系の楽器の活用、③のびのびと自由に音楽表現できるような半定形化された音楽活動を設定した。

その結果、A は担任に活動を代替してもらいながら母親と一緒に最後まで参加することができた。また、音楽づくりの活動では、A の特技（プラモデルづくり）が分かり、A はお気に入りのプラモデルを題材にクラスメイトの前で電子ドラムによる即興演奏をしてみせた。A の表情はリラックスしており、活動後の片付けを積極的に行い、楽しそうな様子だった。A はその後の「音楽の時間」もすべて参加し、第４回の活動後には一緒に昼食をとることもできた。

（２）音楽劇『はちまんの河童鬼っ子』の考案と文化祭での発表

１）「音楽の時間」の外側とのかかわりをめざして

「音楽の時間」の長期的な目標として、『音楽の時間』の外側にある学校文化とのかかわりが挙げられる。それは、「音楽の時間」の中生徒たちが見せる感じ方や表現を、異質なものと正しくないものとするのではなく、ひとつの表現として「音楽の時間」に参加していない人々と関わることができればという願いでもある。これまでの取り組みとして、蜜柑を題材にした生活単元学習の中に「音楽の時間」の活動を含めたことが挙げられる。「音楽の時間」において、生徒一人ひとりが育てた蜜柑につけた名前をもとに音楽づくりを行い、研究授業という形で学外の先生方に発表する機会を得ることができた。今年度は、担任の提案で有田川町（清水地区）の民話をもとに音楽劇を文化祭で発表することになった。

２）音楽劇の題材の選択と、音楽活動の考案

音楽劇の題材は、有田川町（清水地区）の民話である『はちまんの河童鬼っ子』である。『はちまんの河童鬼っ子』は、清水地区に住む河童の兄妹が地元の人たちと交流を深めていく物語である。河童の兄妹は、檜木平に出かけて行き来する村人たちや侍と交流していた。しかし、城の移築に伴い兄妹は、八幡のお宮（現在の八幡神社）に居つくようになる。河童兄妹は神社のお世話をし、そのおかげでお宮は賑やか

になったという、村人たちとの共存が描かれている。この話は有田川町（清水地区）の商工会によって、紙芝居化されている。

8月に担任と大学教員で打ち合わせを行った際、練習時間は3か月弱という短い期間であること、発表時間も15分程度であることから、紙芝居をベースにしながら簡単な芝居や合奏、音づくりを行うことを決めた。ナレーションやキャストの決定、小道具の作成や演技指導は担任が行い、楽器の選定や合奏、パワーポイントのスライド作成は大学教員が行った。

音楽劇における音楽活動は、主に、①八幡を流れる有田川の様子、河童兄妹が鬼っ子に化けた際にその姿を映した池の样子の音づくり、②《河童兄妹のテーマ》の合奏、③物語の最後で踊る《河童鬼っ子音頭》、の3つであった。①音づくりに関しては、大学教員がレインスティックなどいくつかの楽器を選定し、担任によって中学校前を流れる有田川のサウンドスケープを行うなど、川の音のイメージを膨らませた。また、池の音については生徒たちが情景をイメージして音づくりを試みた。②《河童兄妹のテーマ》と③《河童鬼っ子音頭》は、物語の最後で2曲を同時に演奏する、いわゆるパートナーソングのようになるよう、ミクソリディア旋法の音で構成した。また、オスティナートを多用し、簡単に演奏できるようコンパクトでシンプルなものにした。各曲の歌詞は、「音楽の時間」内に生徒たちと一緒に考えた。音頭のメロディーは、生徒や町民たちになじみのある《清水町：まち音頭》（作詞：桧尾貞子 作曲：北原雄一 編曲：福田正 昭和44年9月発表）のイントロを採用し、歌詞をつけ音頭の振り付けも行った。この他に大学教員は、音楽づくりや劇中に使用するパワーポイントに活かすために、担任から民話や地域に関する資料を頂き、物語の中で登場する「檜木平」や「あらむき」、「お宮」といった場所が清水町のどこにあるのか、その位置関係を調べて実際に訪れた。

3)「音楽の時間」内外での取り組みと本番

第2～4回の「音楽の時間」では、劇中の音づくり・音楽づくりを行うとともに、通し練習を行った。

①2つの場面の音づくりは、何度かの改変を重ねて以下のようになった。冒頭で流す川の音づくりでは、キーボードによるテーマ曲のメロディーを背景にレインスティックを即興的に演奏することにした。これに対して池の音づくりでは、鳥の声（shrilling chicken）と池の水の様々な様子を表す音（フィンガーシンバル、鉄琴、カリンバ、レインスティック）を即興的に演奏することにした。

②《河童兄妹のテーマ》は、最初にメロディーのリズムだけを取り出して太鼓のビートに合わせて全員で唱えた。その後、物語から河童兄妹がどんな性格なのか、何ができるのかなど生徒たちに考えもらい、メロディーのリズムに合わせて歌詞「河童鬼っ子、〇〇〇〇」の「〇〇〇〇」の部分を出し合い、最終的に4つの詩を採用し、動作も参加者で考えた。当初は楽器を演奏しながら歌うように考えていたが、本番までの期間が短く、練習時間の確保などの問題から、キーボードを担当する生徒1名と大学教員2名が伴奏（トゥバーノ、グラビティチューブ、ブロックバー、チベタンベル）を担い、その他の生徒はメロディーを歌うまたは唱える形になった。

③《河童鬼っ子音頭》は、当初は物語の中盤の村人たちとの交流のシーンで使用し、エンディングでは前述したように《河童兄妹のテーマ》と重ねて演奏する（パートナーソング）を予定していたが、最終的には音頭だけをエンディングとして演奏することになった。生徒たちは、大学教員2名の伴奏（キーボードとトゥバーノ）に合わせて歌いながら踊った。

ナレーション、演技、歌唱、器楽演奏など、生徒たちは複数の役割を担っており、明瞭な発声・発語、

台詞や動作の暗記、順序立てた思考などが要求される。生徒たちは担任の指導のもと、普段の学校生活の中で時間を設定し繰り返し練習した。踊りが上手な生徒や楽器で表現することが得意な生徒など、この取り組みが互いをより知り合う機会になり、関係性を深めていくことにもなったようである。

11月25日行われた文化祭では、「音楽の時間」の生徒全員が発表できた。どの生徒も堂々とした様子で演じ、歌い、奏でることができた。特に前述したAは人前に出ることが得意ではなかったため、当日の参加も心配されたが、他の生徒たちと同様に自身の役割（キーボードの演奏、音づくり、踊り、最後に拍子木を打ち鳴らして一言）を完璧にやり切った。

【写真は、「音楽の時間」での様子（合奏と通し練習）】



【まとめ】

今年で本連携事業を始めて6年目になる。今年度は、参加者の変更もなく、昼食も一緒にとることができるようになり、生徒たちとより深く関わることができた。しかし、本取り組みは年に数回やってくる大学教員だけでは成り立たない。担任が日々生徒たちと真摯にかかわり、保護者や学校内外に対して細やかな気遣いをしてくださるからこそ、「音楽の時間」の中で生徒たちはリラックスして活動に参加し、日常生活とは異なる一面を見せてくれる。このことは、本取り組みの開始から常々感じてきたことではあるが、今年度は担任の力あつての活動であることを強く感じる場面が多々あった。

A とのかかわりはその最たるものであった。担任によるAの様子に対する前向きな解釈や、活動に無理なく参加するための様々な提案によって、Aは安心して「音楽の時間」に参加できるようになった。さらには、この時間を楽しみにしてくれるようにもなった。また、以前からキーボードに興味をもっていたAは、音楽劇でキーボードを担当することになり、とても真剣に取り組んでいた。当初は、前に出ることが好まないAの性格に配慮して、キーボードとパワーポイントの操作といった裏方を担当する話になっていた。しかし、「音楽の時間」外で練習を重ねるうちに、音づくりや踊り、そして最後は舞台上で声をだして物語を締める役割も担うことになった。生徒たちの役割が変化するたびに、大学教員は彼らが演奏しやすくなるよう曲や活動を改変していった。しかし、音楽劇を上演するためには、根気よく何度も練習することが欠かせない。その部分を担ったのが担任であった。生徒たちの心に寄り添う丁寧な積み重ねがあったからこそ、生徒たちは新しいことに挑戦し、互いを励まし認め合いながら音楽劇に取り組むことができた。生徒たちは自信をもって本番に挑むことができたようで、発表後担任から「来年も発表したいと言っている」との感想をいただいた。また、養護教員や学校の教員達、保護者や地域の方々が生徒たちの堂々と発表する姿に喜んでいたり、生徒たちの普段見せない姿に驚いていたこと、そして河童鬼っ子の物語を扱ってもらい嬉しかったこと等を、後日担任から伝え聞いている。

「音楽の時間」は、一方的に活動を提供するのではなく、参加者全員で試行錯誤しながらつくりあげていくものである。音楽劇は、前述したように準備期間の短さから当初の計画から変更をせざるを得ない状況が何度か起こった。とりわけ音楽面については、テクニックは平易であっても面白く、生徒たちの自由な表現が生かされるような楽曲、地域の文化とかかわれるような選曲や活動などを意識したものの、課題や反省点は尽きない。しかし、音楽劇の発表をとおして、僅かではあるものの清水地区の文化や人々に触れる機会となったことは、「音楽の時間」の外側とのかかわりを目指す本取り組みにおいて意義深いものであった。連携校の担任へ感謝を申し上げるとともに、今後も一緒に活動し意見を交流させながら吉備中学校・八幡中学校それぞれの「音楽の時間」を育んでいきたい。